# 砦食む白蟻ども

井田和樹

## その当日

　「アカデメイア・コムリンク企画６課室長の藤松さんですね？　少々お時間をいただけますかな？」
　「そうだが、何だね君は？」車に乗り込もうとしていたところを振り向いた男は、リムレスの眼鏡越しに望月崇へ胡乱そうな目を向けた。「君は雑誌記者か？　取材だったら受付を通してくれないか。こんな駐車場で話せることは何もない」
　「いや、失礼ーー受付を通されるとそちらが困るんじゃないか、と愚考しましてね」
　崇はこれみよがしに、二枚の指で挟んだ写真をひらりと振ってみせた。「お顔に似合わず、なかなかご立派な一物をお持ちじゃないですか。相手の坊や、どう見ても末の息子さんより年下ですよねえ。４つ？　５つ？」
　「き、貴様、それをどこで手に入れた……！」
　肉体労働とは縁のなさそうな、どちらかと言えば色白で細面の顔が赤黒く染まる様は、なかなかに見ものだった。
　「金か？　金が目当てなのか？　いくら欲しいんだ？」焦りを隠せない様子ながらも、徐々にだが駐車場監視カメラからの死角に移動しつつある。頭は悪くないーーだがその頭の回転は崇にとっても、そして背後の車に隠れている相良龍一にとっても、完全な空回りだった。この窮地がその頭のもたらしたものと理解できないのだろうか。
　「何ならこの場で１千万でも２千万でも小切手を切っていただきましょうか？　……やだなあ、そんなことしたら脅迫罪になっちまうじゃないですか。ただ……」
　その言葉を合図に、龍一は男の背後から組み付いた。手首と肘の急所を的確に決めてしまえば、多少の力では振りほどけない。力比べになったとしても、龍一の腕を跳ねのけられる者などそうはいない。
　拘束バンドで手首を縛るまでに半秒。前方の崇が叫ぼうとした口にボールギャグを突っ込み固定するまでに半秒。リムレスの眼鏡を弾き飛ばし、上下の瞼を閉じられないようにクリップで固定してしまうのにもう半秒。
　「ただこちらの箱を、ちっとの間、覗いているだけでいいんですよ」崇は悪戯っぽく笑いながら、呻いている男の顔面に金属製の箱を近づける。「大丈夫ですよ。目ん玉が乾かないように、後ろのでかい奴がちゃんと目薬を差してくれますからね。ほら、『時計じかけのオレンジ』って映画、ご存じでしょ？」

　「お疲れ」
　「言われた場所に転がしてきた。運が良けりゃお漏らしする前に助けてもらえるだろ」助手席に滑り込んだ龍一は肩をごきりと鳴らした。「じゃ俺、一仕事したからもう帰っていいか」
　「馬鹿言ってんじゃねえ、ふん縛られて呻いているおっさんに目薬差すだけの誰にでもできる簡単なお仕事だろ」崇は思い出したように懐から写真を取り出し、こちらに投げてよこした。「そうだ、もう使わないから、これでも見てほっこりしろよ」
　「……何だこれ？」
　「見ての通り、母豚のお乳を無心に吸う仔豚ちゃんたちだよ。『ハンマーを持つ者には、何でも釘に見える』んだ。覚えておけ」
　「こんなもんでびびるなんて、あのおっさんも気の毒に……」
　「良心なんざこれっぽっちも痛まねえな。マルス関連の『黒い』投資ファンドをそうと知って転がして、さんざん甘い汁を吸ってきたんだ。たまには地獄の水も舐めた方が、人生に張りが出るだろうさ」崇はそううそぶいてから、指先でくるくる回していたオレンジ色の作業帽を目深にかぶった。「さ、次は害虫駆除だ。忙しいったらありゃしねえ」

　『北原インターネット・データセンター』はまばゆいばかりの白一色の施設だった。去年完成したということだから無理もないが、周囲のすすけた印象の雑居ビル群に比べるとまるで天から落ちてきたような真新しさだ。何にせよ、龍一にとって用がなければ寄りつかない類の建物であることは確かだった。
　「どうも、お疲れ様です。ミマナ・ペストコントロールサービスの持田です」
　ものものしい金属製のゲート前。いかにもこの道十数年といった顔で崇は作業帽を取り、うやうやしく挨拶した。背後の龍一も、見習いの顔をして一礼する。
　「ああ……害虫駆除業者の方ですね。ではこちらが入管証になります」
　龍一と大して歳の変わらないのに早くも「制服の権威」を身につけ始めた警備員が、愛想など薬にしたくもないといった態度で対応する。崇が書類にサインをしている間に、龍一は警備ポストに目を走らせる。監視モニターに向かっているのが２人、デスクで書類仕事をしているのが１人。人通りが激しく忙しいせいもあるのだろうが、弛緩した雰囲気は微塵もない。甘く見るべきではないな、と感じる。
　「空調室はこの奥です。それ以外の区域に入ると、警報が鳴りますのでお気をつけて」
　「ああ、ええ、心得ています。お手洗いは借りられますよね？」
　「可能ですが改装工事中ですので、念のため許可は取ってください」
　あ、はい、承知しました、と崇が頭を下げている間にも警備員の装備を確かめる。軍や警察のものと遜色ない防弾ヘルメットにボディアーマー、ハンズフリー仕様の無線機。腰のホルスターには警棒と電撃銃。

　一礼して歩き始めた崇の後を、龍一も仕事道具を満載した台車を押して続く。歩きながらも、背後の視線が消えなかった——詰所に立つ警備員の視線だ。
　前方を歩く崇が振り向かず小声で毒づく。「見たかよ、あの剣呑な目つき！　雇われ警備員にしちゃ、大した気合いの入りようだぜ」
　「警戒レベルが通常より数段上がっているな」龍一も小声で返す。「何が襲ってくると思ってるんだろうな。コサック騎兵か？」
　「タラス・ブーリバかよ」笑えねえ、と崇は面白くもなさそうに吐き捨てる。「あとお前の歳だったら、そこはせめて『バギーに乗ったモヒカン』ぐらいにしとけ」
　「俺だって本ぐらい読むんだよ。……結構ほうぼうで暴れたから、ある程度フレが回ってるんじゃないのか？」
　「そうかも知れんし、関係ないのかも知れん。どっちにしろ俺たちのやることは変わらんさ。予定通り始めるぞ」
　「わかった」
　「ガスの配合はチェックしたろうな？」
　「充填前に１０回は確かめたよ。俺も大量殺戮犯になるのはごめんだ」
　「ならいい。始めるぞ」

# 一週間前

【……あなたたちにこれまで依頼してきたのは、マルス・コーポレーション構成員らや関連企業施設への襲撃・強奪がほとんどでした。今回の仕事は、それらとはやや位相を異にします】
高塔百合子からの通話に、龍一は無意識に唇を舐めていた。元来こけおどしの類は口にしない女だ。
「上級幹部の暗殺か何か、ですか？」
【いいえ。近年マルスが立ち上げた『Ｈｕｂ』という非合法サービスサイト、その全ログと顧客情報が今回の目標です。それらを隠匿した詳細な場所が判明したのです。簡単に手出しできない場所ではありますが、マルスの喉元に迫る千載一遇の機会であることには違いありません】
相手が百合子でなければ、口笛を吹いていたかも知れない。
マルス・コーポレーション。元は指定暴力団の一フロント企業に過ぎなかったが、近年では銃器・麻薬・人身売買といった旧来の犯罪だけでなく、インサイダー取引や株式操作と言った経済犯罪に大きく方向転換し、潤沢な資金源を得てその規模は確実に拡大・暴走の域に達している。
高塔百合子は龍一たちを使い、数度に渡ってマルスへの妨害・破壊工作を成功させてきた。龍一は、その裏に百合子のマルスに対する明確な敵意——もっと言えば、憎悪を嗅ぎとらずにいられなかった。
最近、龍一は確信しつつある。百合子の目的は、マルスの背後にいる何者かなのだ、と。マルスを叩き続ければ、そいつはやがて姿を現すしかない——少なくとも何らかの反応を起こさずにはいられないと。
そのマルスの運営する非合法サービス、いわば本業を叩くのが今回の目的だという。興奮せずにはいられなかった。これは、確かにいつもの仕事とは一味も二味も違いそうだ。
【詳細なプランは望月さんと協議してください。これまでに比べ数段難易度の高い案件です、必要な資金・装備・情報は遠慮なく申請してください。可能な限り融通します】
「わかりました」
【——それから】よどみのなかった百合子の口調が、一瞬だけ空いた。【今回は実作業を行う人員の他にも、目標までのナビゲートとデータの抽出を行うバックアップ要員が必要になります。私はそれを、夏姫さんに一任したいと思っています】
新たな「案件」に向けて回転を始めていた頭が、一瞬にして冷えた。その言葉の意味が胃の腑に沁み込むまでに、ある程度の時間が必要だった。
「それがあなたの決めた、是が非でも必要な人選ですか？」非難するような口調になってしまったが、百合子はそれをとがめはしなかった。「あの娘を参加させるにしても、もう少し先の話だと思っていました。それとも、そう思っていたのは俺だけだったんですか？」
【彼女の情報分析および三次元的空間把握能力は、私よりも相良さんの方が詳しいと思います。経験不足は確かに懸念ではありますが、それを差し引いても今回の案件には必要な技量だと私は判断しました】
「それがあなたの出した結論なら」
自分でも愕然とするほど冷ややかな声が出た。「俺の言うことは、何もありません」
【……あなたや望月さんには、ただでさえ困難な案件にさらに負担を書けることになると思います。それを反映しての今回の報酬とお考えください】
すみませんとは言いません。私が完全に正気のまま、目を見開いて選択したことですから——そのような思いを言外に込められては、龍一としても本当にそれ以上何も言えなかった。

「ありがとう龍一、やっと私を参加させてくれるのね!?　嬉しい、あなたならきっとわかってくれると思ってたの！」
蹴破るような勢いでドアが開き、ほっそりした影が踊るような足取りで部屋に踏み込んできた。風もないのになびいているような、ウェーヴのかかったふんわりした髪。アーモンド型の大きな目が、心からの歓喜をたたえて龍一を正面から見つめる。
細い手首と足首を飾る精緻な装身具。明るい色合いの髪に合わせたらしい鮮やかな緑色のワンピース——崇いわく『身ぐるみ剥いだら一財産』の出で立ちだ——の裾をひるがえして、彼女、瀬川夏姫はボルゾイ犬のような勢いで龍一に飛びついてきた。
龍一は歓喜そのものの表情で見上げてくる少女を見下ろし、次にこいつは見ものだと言わんばかりににたにた笑っている崇にゆっくりと目をやり、そして吐息がかかりそうな距離にいる、見れば見るほど華やかな少女へ視線を戻した。
夏姫が不満そうに上目遣いをする。「ちょっと、嬉しいんならもう少し嬉しそうな顔しなさいよね。何なの、その二日酔いの仏像みたいな半目は？」
「嬉しいなんて一言も言ってない」
龍一の仏頂面に、彼女はぱあっと顔を輝かせた。「あら、じゃあ言葉に言い表せないほどの喜びを感じているのね？　やだ、そんなに喜ばれると、何だか私も照れちゃう……」
本当に頬を赤らめて顔に手を当てる夏姫を半目で見下ろし、龍一は壁際で目に涙をためて笑っている崇を睨みつけた。「あんたもなんか言ってやれよ。煽るだけ煽って放置すんのが大人か？」
「やだね。面白いもん」
「子供か！」
一歩離れた少女が口を尖らせる。「やめてよね、望月さんにまで当たり散らすの。だいたいさっきか

ら何よ、私が参加するのがそんな気に入らない？」
「一から十まで気に入らないよ。わかってるのか、個人情報に関するハッキングは未成年でも重罪だぞ」
崇がへらへら笑った。「お前だって子供じゃん。それに龍一、経験うんぬんを口にし始めたらお前はそもそもここにいないってことは覚えておいた方がいいぜ。それともお前、最初からその姿のまんまでこの世に生まれてきたのかよ？」
言葉に詰まる龍一を見て、ふふん、という調子で夏姫は笑ってみせた。女らしい慎みや遠慮なんて言葉ならさっきヒールの踵で踏みにじってトイレに流してきたわ、と言わんばかりの表情だ。「私の参加を拒むんだったら、相応の理由を示してもらわないと。『とにかく気に入らねえ！』は意見のうちに入りませんからね」
夏姫はかぶりを振りながら、大きく両手を広げてみせた。そういう大げさなポーズを普段から嫌味なく取ってみせる娘だ。「経験が足りないなんてわかってるわ。だったら足りない分をどう補えばいいのか教えてよ。何を用意すればいいの？　光プロセッサモジュールのタイムレンタルサービス？　〈ハリウッド・クレムリン〉の偽造アドレス？　旧北朝鮮サイバー戦部隊から闇市場に流出したトロイの木馬ウィルス？　それとも私のおっぱいの谷間？」
「前の二つはともかく、三つ目は周囲への被害が大きすぎる。最後のはいらない」
「龍一はおっぱいに興味ないの？」
「……そういう問題じゃないって、わかってて言ってるよな？」龍一は壁際の崇を横目で見たが「俺の腹筋が死ぬ」とひいひい笑っているだけで全然頼りにならない。助けを期待した俺が馬鹿だったと思った。
「だいたい約束だったじゃない、私が相応しい力量を示したら参加させてくれるって。それとも、もう忘れたの？」
龍一はどうにか食い下がろうとした。「覚えてるよ。でも、もう少し経験を積んだ後ならともかく、今回からなんてちょっと急すぎじゃ……」
夏姫がわざとらしくあくびして見せる。「気の長い話ねえ。きっとあなたのお眼鏡にかなう頃には、私はしわしわのお婆ちゃんだわ」
「あのなあ、龍一。こっから見てるとこの部屋ん中で今、お前が一番餓鬼っぽく見えるぜ？」崇はようやく笑い止んだ。「それとも高塔のご当主には正面から盾つけなくて、俺やこっちの嬢ちゃんには当たり散らせるってか？　相良龍一はそんなけち臭え根性の持ち主だったのか？　お前の〈インストラクター〉としちゃ、情けなくって涙も出ねえよ」
百合子の名を持ち出されて、龍一は説得のための言葉が尽きたのを悟った。
「……わかった」龍一はどうにか歯ぎしりを我慢して言った。「でも忘れるなよ。しくじったら俺も君もおしまいなんだからな」
それを聞いた瞬間に崇と夏姫は「わあい」と声を上げてハイタッチを始め、龍一はひどい頭痛をこらえなければならなかった。

「……とは言え、問題はその方法だ」
崇はタブレットをテーブルの上に置いてキリマンジャロの入ったカップを口元に運びはしたが、普段ほどその香りを楽しんでいるわけではなさそうだった。彼なりに悩んではいるらしい。
メインストリートに面した瀟洒な喫茶店。男性客よりも家族連れやカップルの方が目立つお洒落な内装の店だ。「まさかこんなところで強盗の算段をしてるとはだれも考えないだろ」というのが崇の言い分だったが、どこまで真に受けていいのやら、というのが龍一の正直な感想だ。ちなみに夏姫は龍一が何か言う前に目を輝かせて席に着いた。二対一で龍一の一方的敗北である。
そもそも男尊女卑の権化のような崇が、夏姫の前では妙に物分かりのいいおじさん然とふるまうのが余計に気に入らない。「毛も生えそろってない小娘がナマ抜かすな、裸に剥いてあそこがずり剥けるまで可愛がるぞ」ぐらいのことは言いそうなのだが。高塔百合子の遠縁の娘だからといって遠慮するような男でもないことを考えれば、なおさらだ。
「これが『北原インターネット・データセンター』のセキュリティだ。一般公開されている範囲だが、大幅に違うってことはないだろう。頭に叩き込んどけ」
龍一はウィンナーコーヒーのカップを手元に置いた。「データセンター？　顧客から委託されたサーバーやメインフレームを管理する専門の施設……だったっけ？」
「そうだ。大規模なネット環境を一般の社屋で維持するのは手間がかかりすぎるし、最近じゃ事故や犯罪、停電や自然災害への備えも必要だからな。餅は餅屋ってことで、データ管理も含めて外部に丸投げしちまった方がリーズナブルってことだ。未真名市にもその手の施設がどんどこ建ち始めている。聞いたことはあるだろ？」
「聞いたことはなくもないが、自分に関わってくるとは思わなかった」
龍一はタブレットに表示された情報を閲覧していたが、途中から自分の顔がどんどん渋くなっていくのがはっきりわかった。「地上４階・地下１階の完全な耐震構造。網膜識別式生体認証、ＩＣカードによるゲート認証システム、無死角監視カメラ、２４時間常駐・三交代制の警備スタッフ……」
両手でカフェオレボウルを抱えていた夏姫が、脇から画面を覗き込んできた。「これ、００７とかイーサン・ハントとかが扱うような案件なんじゃない？」
崇は笑った。「まあ、ヤクザの事務所にカチ込んで無記名証券を金庫ごと分捕ってこい、なんて仕事とは訳が違う。だが、方法がないわけでもない」

「でもデータセンター……それもインターネット専門施設なら、クローズドなシステムじゃ成り立たないでしょう？」と夏姫。「ネットからの侵入はできないの？」
「それができたら、高塔のお姫様が俺たちごろつきのところに依頼を持ち込むと思うかい？　確かにネットからのアクセスは可能だが、それがまた曲者でな。ネット専門のセキュリティ企業数社との提携で常時監視体制にあるそうだ。不正アクセスが発覚しようもんなら、軍事基地そこのけの速さで逆探知されかねん」
「電子・物理共に難攻不落の要塞、ね」
「降りるかい？」
夏姫は微塵も臆した様子なく、崇を正面から強く見つめ返す。「冗談でしょう、まだ始まってもいないのに。それに、私のデビュー戦として不足はないわ」
どうよこの女神様っぷり、と言わんばかりに崇に目配せされ、龍一は憮然とした。彼とて夏姫の時々見せる不屈の闘志に、感じ入るところがなくもないのだ。それが犯罪行為であることさえ考えなければ、であるが。
「龍一、お前だったらこの施設をどう制圧する？　この際だ、『市民の良識』にはおねんねしてもらえ」
「……ガス、かな」
夏姫がほんの少しだが、肩を動かしたことを龍一は見逃さなかった。
「非致死性の睡眠ガス。警備ポストを含む施設全体を瞬時に制圧する方法はそれしか思いつかない……後は時間を止めるか、常人の３０倍の速さで動くかだな」
「なるほどな。解答としては３０点だ。各空調ダクトはＮＢＣ対策済み、三重構造の対ガスフィルター。しかも空調は警備ポストからリアルタイムで監視されているから、何かあればすぐ気づかれる。ついでに言えば警備ポスト自体、ネットを介して監視下に置かれている」
「やっぱり素人考えか……」
「いや、ガスってアイデア自体は悪くない。もう少し磨きをかけてやる必要はあるが」
崇はタブレットの表面を軽く叩いた。「この施設の空調は警備ポストから２４時間体制で監視・制御されている——逆に言えば、警備ポストさえ制圧すれば施設のあらゆる区画の空調を制御できるってことだ」
「そりゃ、理屈はそうだろうけど……そこを制圧するまでが一苦労って話をしてなかったか、俺たち？」
「まあ、焦るなって。まずは一個一個ずつ問題を解決していこうじゃないか。……嬢ちゃん、ネットセキュリティからの監視に欺瞞をかませられるのはどのくらいだ？　施設全体でなくていい。今は警備ポストのみ騙せるとして、だ」
「５分……かな」少し口ごもった末、彼女は言った。「正直なところ、複数のネットセキュリティを騙しおおせるのは簡単じゃないわ。高速プロセッサと連携したエージェントシステムさえあれば欺瞞自体は不可能じゃない。でもやっぱり、警報を鳴らさないのは５分が限度だと思う」
「上出来だ」崇はにやりと笑った。「次にゲートの生体認証だが、データセンターの中の〈顧客〉の中に何人か有力候補がいる。俺はその中で一番『使えそう』な奴にこれから張りつく。こいつら不用心にもＳＮＳに実名で登録してやがるから、家族構成やスケジュール、通勤ルートを割り出すのは簡単だろう。セキュリティは完璧でも、使っている奴らは全然完璧じゃないな」
本人の知らないうちに個人情報を「丸裸」にする——確かに、必要とわかっていてもやりたくない不愉快な作業だ。逆に言えば、その手の作業で崇以上の適任はいないだろう。
「……で、俺は何をすればいい？」
「会ってもらいたい人がいる」

「ここ……のはずだがな」
龍一と夏姫がたどり着いたのは、市の中心部からやや離れた閑静な住宅街だった。散歩する老人や乳母車を押す若い主婦。微風が木洩れ日を揺らす。
「本当にここでいいのよね？」傍らの夏姫も怪訝な顔をする。「望月さんの知り合いだから、どんな怪しげな場所に行くのかと思ったけど」
今日の夏姫はずいぶんとスポーティな装いだった。動きやすさを重視したのか明るめの髪を深紫色のシュシュでまとめ、黒のシャツに深緑のジャケットを合わせ、細身のジーンズを身につけている。
「ずいぶん、その、勇ましい格好だな」
大きな目がじろりと龍一を睨んだ。「あんまりひらひらした格好だと、動き回りづらいでしょ」
君はそもそもひらひらした格好が苦手なんだろう、と言いそうになってやめた。ひっぱたかれそうだ。
「あなたがいつも着ている『無法の法』シャツに比べたら、この服だってパーティドレスよ」
「左様で」それに関しては返す言葉もない。
目的の建物についたが、二階建てに猫の額ほどの庭の付いた、別に怪しくも突飛でもない一戸建て住宅だった。『砧』と書かれた表札の下のインターホンを押す。
返事の前にドアが開く。「よく来たね。望月君から話は聞いているよ」
姿を見せたのはチェック柄の開襟シャツを着た、痩せても太ってもいない初老の男性だった。つかみどころのない男だった。肌の色艶は確かに五十代だが、あまり日に焼けていない風貌は少年がそのまま歳を取ったようにも見える。

「相良龍一です」
「瀬川夏姫です」
「砧尚輝だ。入ってくれ」
返事を待たずにさっさと踵を返す。歓迎しているようではないが迷惑そうでもない、といった態度だ。こりゃ結構煙ったい人かもな、と夏姫と目を見交わす。
「気楽にしてくれ。妻が出ていってからずいぶん経つし、子供もめったに寄りつかないからね」
立派だが詰め物が柔らかすぎるソファに夏姫と二人で腰かけていると、男が三人分のコーヒーカップを持ってきた。
「あの男が君たちのような前途有望そうな若者を顎で使えるようになるというのは、意外だがそうでもない気もするね」
「砧先生？」夏姫が目を見開く。「失礼ですが、明応大学の砧教授ですか？　群知能ネットワーク研究の第一人者の……私、あなたの論文を読みました」
「それは光栄だ」砧はわずかだが相好を崩した。わりと好き者だなこのおっさん、と龍一は少し安堵する。
室内では人の背丈ほどもあるガラスケースに収められた、茶褐色の巨大な塊が目を引いた。観賞用のオブジェかと思ったが、違う。表面で無数の白い粒々がもぞもぞと蠢いている。
「これは……蟻塚ですか？」
「白蟻のね。適度な温度と湿度を保つのにいつも苦労しているよ」砧は苦笑しながらカップを口に運ぶ。「妻はこれが嫌で出たらしいがね」
そりゃそうだろう、という気になる。
夏姫が興味深そうにケースに顔を近づける。「不思議な生き物ですよね。一体一体はばらばらに動いているのに、全体では見事に統制が取れている……」
「そうだね。一体一体は愚かなのに、集団では驚くほど精緻な行動を取る。まるでプログラムされたかのように。……愚かかも知れないが、幸せな奴らだよ」
そう言う砧の眼差しは、龍一たちに向けるものより遥かに生気を帯びていた。自分がその一員でないことが心底残念だと言わんばかりに。
「あと、白蟻は蟻の仲間じゃないんだ。ゴキブリの仲間だよ」
夏姫はものすごいスピードでケースから離れ、龍一の背後に身を隠した。
「これを持って行きなさい。あの男が欲しがっているものが中に入っている」
テーブルの上に置かれたデータスティックを見て、龍一は思わず聞いてしまった。「いいんですか？　これはあなたの研究の集大成なんでしょう？　それに俺たち、何に使うか説明してもいないはずなんですが」
「かまわないよ。誰が使おうと、何に使おうと同じことだ。皆自分が正しいと思っている以上、同じ結果をもたらす」
龍一は答えず、少し頭を下げてからそれを懐に収めた。
「そうだ、望月君に伝えておいてくれないか」
「どうぞ」
「子供が子供を教え導くなど笑止だ。ましてや犯罪のお先棒をかつがせておいて、自分は神にでも至るつもりか、と」
「……伝えます」

「おかえり。何か言ってたか、センセイは？」
「あんたに伝えてくれって」龍一はデータスティックを手渡しながら言った。「地獄に落ちろ、だってさ」
少し意訳しすぎたか、と思ったが崇は怒らず鼻で笑っただけだった。
「あのセンセイなら言いそうなこった。罪に対して必ず罰が下される、って信じてるんだからおめでてえ世代だ。罰もない方がよっぽどむごいこともあるのにな。お前ならよくわかるだろう？」
思わぬカウンターに龍一は黙り込んだ。傍らの夏姫が怪訝な顔をしているのがわかったが、そちらに顔を向ける気にはならなかった。
「まあいい」崇はにやりと笑った。「これで第二段階に入れる」

龍一と崇が趙安国の事務所に着いた時、彼は遅い昼食を取っている最中だった。坦々麺をずるずるとすすり込み、毒々しいほどに真っ赤な汁を水のように飲み干し、げっぷを一つしてから器を置いた。
「ちょうどよかった。今度から品物の受け渡し方法が変わるんでな」
「へえ。リニューアルってことか」
趙が二人を案内したのは、事務所の裏に停めたキャブオーバータイプのライトバンの前だった。別に改造されてもいない、艶のない灰色の塗装があちこち剥げかけたただのライトバンだ。
「……こんなボロ車、やるって言われてもいらねえぞ。それとも中は四次元ポケットなのか？」
「まあ見てなって。こいつの売りは中身なんだ」
よほど自信があるのだろう、趙はほくほくとした顔でキャビンドアを開けた。「さあ見ろ。合衆国憲法修正条項第２条もびっくりだぜ！」
怪訝そうに内部を覗き込んだ崇が驚嘆する。「移動式のディーリングルームか……！」
「企業舎弟がブラックマネーを運営するのにこういうのを使ってるって聞いてな。武器取引でも使わ

ない手はないと思ったのさ」趙は得意満面だった。「警察だって馬鹿じゃない。派手に動きすぎる『業者』は泳がせておいて、客もろとも一網打尽って魂胆だ。今後、現金と品物を直接現場で交換するようなやり方はどんどん廃れていくだろうよ。進化かさもなくば死か、だな」
　くたびれた内装に設置された真新しい端末を見て、崇は唸った。「こいつで買いたい物を選んで決済すれば、数日後に好きな場所へ配達してくれるって寸法か」
　「自宅が嫌なら、近所のコンビニでも指定できるぜ」
　「あほ抜かせ」崇はよほど興奮しているのか、無意味に指を鳴らしながら端末の前に座った。「商品の方もリニューアルか」
　「最近は妙にルートが活気づいていてな。面白いブツが流れてくるんだ。信頼性はともかく、そのアイデアは買いだぜ」
　崇の背後からディスプレイを覗き込んだ龍一は呆れ果てた。「確かにある意味すごいけど、あんまり欲しくないもんばっかりだな……そっちの『２５ミリチェーンガン』って何だよ？　何に使うんだよ？」
　「穴を開けるためだろ」崇はすでにブラウジングに夢中だ。「今日欲しいのは、もう少し毛色の違う奴でな」
　趙も顎をしゃくってくる。「そっちのハイドラ７０ミリロケット弾ポッドなんてどうだ。今なら３３パーセントオフだぞ」
　「そういうんじゃないっつってんだろ。……よし、あった。これだ」
　崇の選択した「品物」を見て龍一は趙と顔を見合わせ、それから二人してほぼ同時に言った。「何に使うんだ、そんなもん？」

# その数日後

「……何だこりゃ？」
崇に言われて指定の地点——段ボールの空き箱が散乱する倉庫街——にぽつねんと置かれた「荷物」を持ち上げて、龍一は怪訝な顔になった。想像以上に軽いのだ。しかも、中で何やらかさかさと動き回る音がする。
何となく嫌な予感を覚えつつ、持ち帰る。
「おかえりなさい。あら、何よそれ？」
「俺にもよくわからないんだ。望月さんに言われて持ってきただけだからな」
「ご苦労、ご苦労。これでようやく次の段階に進めるな」
「次の段階？　そもそも、何なんだこれ？　さっきからかさかさ動く音が聞こえるけど、生き物なのか？」
「紹介するぜ。今回の俺たちの相棒だ——よろしくゴキ太君。いや、ゴキ美ちゃんかな？」
崇は手際よく包装を取り去る。中身を一目見た瞬間、夏姫は凄まじいスピードで龍一の後ろに隠れた。龍一は動かなかった。夏姫が背後にいたからである。
一抱えほどもある半透明のケースの中で蠢いていたのは、油光りする無数のゴキブリだった。

崇は何食わぬ顔でケースの上部から催眠ガスを一噴射した。中でうごうごと蠢いていたゴキブリたちがぽとりぽとりと落下して眠りに落ちていく。
「さすがに生きた奴をそのままだと仕事になんねえからな……」
ゴム手袋をした手で一匹つかみ、裏返した。傍らのアルミ箔を破り、錠剤のように一粒ずつ封をされた極薄のチップを注意深くつかみ出す。半田ゴテを器用に操り、腹の神経節にチップを固定していく。
「こいつはペットの餌用に無菌状態で培養した奴だ。まあ雑菌にまみれてない分、外界に出すとそう長くは生きられんがな。清潔さじゃカブトムシより上だぞ？」
「それでも私やらないからね!?　絶対手伝わないからね!?」
「手伝わせるつもりもないよ……」
意を決し、ケースの中から一匹つかみ出す。ガスが完全に回り切っていないのか、薄いゴム手袋越しに足がもぞもぞと動くのが実に気持ち悪い。
「棘だらけの足の感触が嫌すぎる……」
「黙ってやれ。ガスが切れちまうぞ」崇はもう二匹目に取りかかっている。「犯罪も料理やワインと同じだ。じっくり手間をかければかけるほど、いいもんができるんだよ」
理屈はわかるが、それが生ゴキブリ相手のお医者さんごっことは思わなかったよ、と龍一は内心呟いた。

「……終わったな」数時間後、さすがに疲れたのか崇はうーんと呻いて伸びをしている。
「手どころか全身を洗いてえ……」龍一は忌々しげにゴム手袋をゴミ箱に叩きこんだ。「このおぞましい勤行に意味がなかったら本当に殴るぞ」
「終わったんなら部屋の空気、全部入れ替えていい？」出るに出られず、かといって手伝うに手伝えず見守っていた夏姫もげっそりしている。「何だかとんでもないものを見せられた気がするわ……」
ふむ、と崇は頷いた。「テストも兼ねて、お前らも自分たちの作ったもんが何か見ておいた方がいいだろう」
崇はタブレットを取り出し、起動させた。画面に表示されたＯＳからして、正規の市販品ではなさそうだった。「さて、あのセンセイのお手並み拝見だ」
初期画面の文字列を見て、夏姫が首をひねる。「『ＲＥGIОN』？　『我が名はレギオン、万軍なるが故に』かしら」
「ローマ軍団の方じゃないか？」
「じゃ、俺はカエサルってとこか」崇は愉快そうに笑う。「あのセンセイらしいや。よし、行くぞ……っと」
崇が画面をタッチしたとたん、目を見張るような変化が起こった。ガスが切れたのかケースの中でもぞもぞと動き始めていたゴキブリたちが、まるで背骨でも通されたようにぴしりと停止したのだ。
「おお？」
「Conect」
崇がタブレットの画面を指でなぞった——瞬間、その指の動きに応じ、まるで筆の穂先のようにゴキブリの群れがざわざわざわざわと移動を始めた。
「おおおお？」
「のの字という字はこう書くの……と」
崇がゆっくりと画面をなぞる——動きに合わせ、何百匹ものゴキブリたちが訓練された兵のように、整然と動く。
「……Blast」
ぱっ、と崇が二本の指を開くと、群れは瞬時に四散した。龍一と夏姫は顔を見合わせ、次の瞬間ほとんど同時に叫んでいた。「何それすごい！」
「RFIDタグと極小の筋電位コンデンサを組み込んだ、『生きた』群知能エージェントだ。文字通りの生

モノ兵器ってとこかな」崇は満足げに笑った。「これで俺様の欲しかった最後のパーツがそろった。さあ、フン族大暴れの時間だ」

# 再び、その当日

　二人は黙って廊下を進んだ。時折、データチェックに訪れるビジネスマンや小奇麗な制服のＯＬ、作業服姿のメンテナンス要員が二人とすれ違ったが、彼ら彼女らの誰も龍一たちに気づかなかったし、気づく様子もないようだった。努力するまでもなく、オレンジ色の作業服に害虫駆除業者のロゴをつけた龍一たちは透明人間だった。
　このあたりでいいだろう、と崇は通路の一角を指した。入口付近の警備ポストとサーバールームの中間、レイアウトの関係上他の通路よりも広くなっており、床面に機材を広げての作業には申し分ないスペースだ。ただ、天井に設置された無死角カメラの目まではごまかせそうにない。
　カメラからの視線を意識しながら、工具入れや光ファイバーカメラ、ガスボンベなどを道具入れから取り出す。本当に害虫駆除をするわけではないので（どころか、その逆だ）それらしく見えれば問題ないだろう。
　ハンズフリーの骨振動式ヘッドセットを装着すると、さっそくイヤホンから夏姫の上機嫌な声が流れ出した。【望月さん、龍一、聞こえる？】
「ああ。君の鼻息までばっちりだ」
【嘘ばっかり。あんまりふざけてると、耳元で痴漢撃退ブザー鳴らすわよ？】怒られた。見えないのをいいことに舌を出す。
「お前ら夫婦漫才も大概にしろ。……こっちは問題なしだ。嬢ちゃん、やってくれ」
【オッケ】一瞬の間。【いいわ、望月さん。これから５分間あなたは『透明人間』よ。でもいいの、そんな短い時間で？】
「心配ご無用。欺瞞は短ければ短いほどいい。それにそれ以上かかったら、俺がしくじったってことだからな」
【わかったわ。でも気をつけて】
「まかせな」
　崇は音もなく立ち上がった。龍一には一瞥もくれない。ここから先は龍一と崇、それぞれの仕事だ——しくじればその時は自己責任、だ。
　龍一はタブレットを操作する。ヘッドセットに装着された小型カメラから送られてくる崇の視界。さすがに緊張しているのか、視界がわずかに上下している。警備ポストの中に常駐している警備員たちに、今のところ不審な様子はない。
　過度に姿を隠したまま、崇がタブレットを操作した。視界に踊る『ＲＥＧIONN』のロゴ。躊躇なく崇の指先が画面をタッチする。
　何の前触れもなく、警備ポストの中に無数の動く黒い粒々が出現した。警備員たちは一瞬、棒立ちになり——次の瞬間、手のつけられないパニックが密室内で発生した。【何だこりゃ!?】【う、うわ、アーマーの隙間に！】【おい、駆除業者は何をやってやがるんだ!?】【わあ、く、首筋に!?　畜生この野郎!?】
　何しろ見た目からして気持ちが悪い。視界の隅を油で黒光りする虫にかさかさと動き回られて落ち着いている人間はそういない。そしてこれが肝心だが、雀蜂などの本当に危険な毒虫に比べれば危険度は遥かに低い。ゴキブリが通風孔から侵入しました、などとわざわざ本部に連絡する警備員はいないだろう。それこそが崇と龍一の狙いだった。
　ゴキブリの闖入で大混乱に陥っている警備ポストへ、崇が影のように音もなく滑り込んでいく。視界こそ共有していたのに、龍一の眼には何が何だかわからなかった。ただ掌底が突き出され、蹴りが見舞われ、肘が落とされて警備員たちが体勢を立て直す間もなく崩れ落ちていくのがわかっただけだった。
【……終わったぞ】ヘッドセットから崇の声。
「どうやって全員しとめたんだ？」
【殴って蹴った】崇の返答はそっけなかった。【最後の障害が消えた。録画機能を切ると同時にガスを流せ。仕上げだ】
　崇の視界の中で、黒い粒々の群れがまるで水のように天井の排気口へ吸い込まれていった。

　しばらくの間、龍一は無心に手を動かし続けた。再度ガスの配分をチェック。これがラストチェックだ。致死性ではない——が、だからこそ精緻な調合が必要不可欠だ。脇下を汗が伝う。
　腕に装着したスマートウォッチが微かな振動で予定時刻を知らせた。龍一はガスボンベのコックをひねり、努めてゆっくりとワゴンの道具入れに手を差し込んだ。今頃、崇もほとんど同じ動作をしているはずだ——セキュリティは切られているが、急激であってはいけない。無意識のうちに、呼吸が浅く、心臓が気に障るほど脈打ち始めた。
　スマートウォッチが二度目の振動を腕に送ってきた。
　龍一たちの前を通り過ぎようとしたＯＬが、突然、すとんと腰を落とした。本人も「あら」という顔になり、そのままゆっくりと床に横たわる。どうしたの、と駆け寄ろうとした同僚の女性が膝を折り、崩れ落ちる。あわててデスクから立ち上がろうとした責任者が、机の上の小物類をなぎ倒しながら倒れ伏した。オーバーな仕草一つなく、周囲の人々が眠るように倒れていく。
　ガスマスクを装着し、頭部全体に密着するよう位置を調整する。それが終わった時、視界に動くものは何一つなくなっていた。
　肩を小突かれる。横を見ると、やはりガスマスクを装着した崇が親指を立てていた。

崇の後を追う直前、龍一は床に正体もなく崩折れている女性の姿勢をできるだけ楽なものにしようとした。偽善的とは思いつつも、そうせずにはいられなかった。

サーバールームへの出入りは自動ドア一枚だけだった。壁にもたれたまま正体もなく寝ているメンテナンス要員の傍らを通り抜けた。
白一色に塗装されたホール上の空間に、まるでギリシャの神殿のように無数の円柱が幾何学的な配置で立ち並んでいた。崇がタブレットを取り出し、確認する。「Ｇ－５７……ここだ」
割れ目も出っ張りも見当たらないつるりとした円柱、ただ一箇所、生体認証のための実験器具のような機構が突出している。
龍一は網膜スキャナに自分の顔を近づけた。その眼球表面には人口蛋白質の被膜を３Ｄスキャナで生成した人工網膜が移植されている。言うまでもなく、あの不幸な男の眼球をスキャンして作ったものだ。４８時間で自然崩壊し剥がれ落ちる、とはわかっているが、自分の目に他人の網膜を張り付けているのはやはり気持ちのいいものではない。掌紋照合装置に両手を押し付ける――もちろんそこにも、偽造した掌紋を貼り付けてある。
軽快な電子音を響かせた後、圧縮空気を噴出しながら巨大な円柱がゆっくりと二つに割れた。液体窒素の冷気が漏れ出し、冷却システム内部に収納された複雑な電子機器が姿を見せる。
崇が中央部のハンドルを引くと、半透明のキューブを幾つも連結したような記憶素子が滑り出てきた。二人はガスマスク越しに目を見交わす。これだ、これこそが彼らのターゲットだ。
「……中に入り込むまでが一苦労だったが、入り込んじまえばあっけないな」
「結局、俺たちが直接侵入するしかなかったんだ、無駄な用心とは言えないだろう」
「無駄な努力ではあったがな」崇はうそぶきながら、記憶素子を耐衝撃ケースに収めた。「さ、仕上げだ。奴らの金玉を蹴り上げる名誉は、龍一、お前に譲ってやる」
ほれ、と崇が手渡したのは原形をとどめないほどに改造された大型のスタンガンだった。受け取り、剥き出しの内部機構に押し当て、スイッチを押そうとして――龍一は手を止めた。自分たちの「サービス」を直接攻撃されたマルスがこのままで済ませるはずがない。やっきになって犯人捜しを始めるに違いない。今までの小競り合いが牧歌的に思えるような、血で血を洗う戦いが始まるだろう。
しかし、だからどうしたというのか。
今さらためらう理由が何もないことに気づいた。龍一は思い切りスタンガンのスイッチを押し込んだ。

「急げ、急げ、急げ！」
崇に急き立てられるまでもない。駐車場に向けて龍一は一目散に走った。床に倒れている人々がもぞもぞと動き出していたが、二人を押し留めることができそうな者はいなかった。
どこか遠くで鳴り始めている警報を聴きながら、地下駐車場にたどり着いた。影際に停めてある自分たちの乗車を見て安堵しそうになった時、
【望月さん、龍一、気をつけて！】これまでにない緊迫した夏姫の声。【駐車場に向けて一基、降下中のエレベーターがあるの。建物内のセキュリティとは別系統にあるみたい。停めようとしても、こちらの操作を受け付けないの！】
「何だと!?」
思わず聞き返そうとした瞬間――資材搬入用エレベーターのドアが開き、中から重々しい足音を立てて常人より二回りは大きい影が降り立った。
両手両足を包む鈍い金属の輝き。甲冑を着込んだ騎士に見えないこともないが、上半身がほとんど半球型の装甲板に覆われているおかげで、奇形のキノコを思わせる異様なシルエットになっている。前方に突き出た幾何学的な形状のセンサーユニット。世界の軍や準軍事部隊で使用されている戦闘用強化外骨格、通称『マイコニド』だ。
そんなものがこの状況で現れるということはつまり、
（俺たちが潰したのとは別の警備ラインか……！）
おそらくバックアップ要員が、NBC防護機能のある強化外骨格とともに別の場所で待機していたのだ。
まずいことに、崇も龍一も銃器や防弾装備を持ってきていない。害虫駆除の業者がそんなものを所持していたら言い訳が効かないからだ。
まさか日本で、警備用の機体に火器は搭載できないだろうが――
『マイコニド』が右腕を上げ、アタッチメントで装着した筒状の物体を二人に向けた。
本能的に危険を察知し、二人は身をひるがえしたが、遅かった。大量の水飛沫が崇を襲い、小柄ではない崇の身体がボーリングのピンのように弾き飛ばされ、背後の車に叩きつけられた。無線を通じて聞こえる崇の苦鳴。
龍一はすぐに察した――瞬間的に大量の水を叩きつけて対象の動きを封じる、暴徒鎮圧用の高圧放水銃だ。ホースを使わないため長時間の放水はできないが、そのぶん小回りが利き、威力も申し分ない。大っぴらに銃火器の所持・使用ができない民間警備会社にはうってつけの装備だ。
「大丈夫か!?」
崇が全身から水飛沫を振りまきながら物陰に走り込む。「どうにかな……しかし、やばいぜ」
今度は放水銃が龍一の方を向いた。反射的に身を翻す。水の塊がすぐ傍らを飛び、真横の高級外車に炸裂して大量の水飛沫を撒き散らした。直撃こそ避けたものの、霧のような水飛沫に一瞬、視界を奪われる。

かろうじて手近のパジェロのタイヤに身を隠す。車体の真下から、ずんぐりした『マイコニド』が重々しい足音とともに歩み寄ってくるのが見える。
エレベーターからもう一体の『マイコニド』が重々しい足音とともに姿を現した。しかもこちらは放水銃ではなく、大型の電極が突き出た電撃銃を腕に装着している。自動車のエンジンを一発でショートさせ、乗員まで昏倒させる電撃銃。かろうじて非致死性兵器のカテゴリーには入るものの、当たり所が悪ければショック死しかねない危険な代物だ。
背筋が寒くなる――追い詰められている。しかも武器はない。
いや、待て。龍一の中で何かが閃いた。これは案外、逆転のチャンスかも知れない。
「夏姫、右手前にパジェロがあるの見えるな。あれに侵入できるか？」
【何か思いついたの？　いいわ、まかせて！】
打てば響くような返事とほぼ同時に、軽い電子音を立ててパジェロのドアロックが外れた。認めたくないが、この状況では実に頼もしい。
運転席に滑り込む。それからどうする？　放水銃と大型電撃銃を装備した強化外骨格に車ごとぶつける？　問題外だ。『マイコニド』には高度なセンサーと連動した火器管制システムが標準装備されている。こちらから的になるようなものだ。
探しているものは別のもの――あった。ダッシュボードの中に、発煙筒とカーウィンチのリモコン。
「望月さん、俺が注意を引きつける。合図したら思い切り引け」
崇はにやりと笑った。龍一が何をやろうとしているか察したのだ。「『引く』だけでいいんだな？」
「それで全部うまくいくよ。俺がしくじらなければな」
パジェロの前面に回り、フックをつかんでワイヤーを引きだす。なぜわざわざ危険な囮役を買って出たのか、とちらりと思う。使命感？　高塔百合子からの賞賛が欲しい？　どちらも違う気がする。たぶんそこにあるのは、自分にこの程度のことができなくてどうする、という馬鹿げた見栄だ。
『マイコニド』が放水銃を向けた。フックをつかんで走り出す。一瞬遅れて背後で大量の水塊がぶちまけられる水音。前方のBMWに身を隠そうとする――危険を感じて身を翻す。圧縮空気で打ち出された大型の電極がBMWにごつんと接触し、次の瞬間、大量の紫電が空気を焦がした。全身の体毛が静電気でちりちりと逆立つ。
あの二体の『マイコニド』、さすがに息が合っている――顧客の車を壊すリスクを冒してでも龍一たちを確保しようという魂胆だろう。データの持ち出しが発覚すれば、信用問題にまで発展しかねない事案だ。理屈はわかる。だが、慮ってやる義理はない。
まずはその見事な連携を崩してやる。
背後のタンクから水を充填し、再び砲口を向けてきた『マイコニド』の足元に発煙筒を投げる。たちまち視界を覆い尽くす白煙。『マイコニド』のセンサー相手では一瞬注意をそらすぐらいの効果しかないだろう。だが、それでいい。
スライディングの要領で『マイコニド』の足元に滑り込む――はずが、見当が狂った。わずかに距離が足りない、目の前では『マイコニド』が完全に体勢を立て直し、黒々とした砲口をこちらに――
その機体表面を、一瞬にしてびっしりと黒い粒々が覆い尽くした。
『マイコニド』は一瞬棒立ちになり、次の瞬間、あわてて両腕を振り回し始めた。何しろ視界中をでかくて油光りでつやつやした虫が動き回っているのだ。訓練された警備員でもあわてずにはいられないだろう。
傍らに転がったタブレットの画面が目まぐるしく動いている。ようやく気づいた。夏姫だ。無線ＬＡＮを経由して、夏姫があのタブレットを――というよりはゴキブリの群れを――操作しているのだ。
【女の子にゴキブリいじらせるなんて最っ低！】声からして涙目になっているとわかる夏姫の叫び声。【『あまみや』のモンブラン、一つや二つじゃ埋め合わせできないからね！】
龍一は思わず、にやりと笑っていた。「吐くほどおごってやるさ」
『マイコニド』の足に向けてフックを投げる。幸い、足の突起にうまいこと引っかかった。たるんだワイヤーを持ってもう反対の足にもからめ、
「今だ、引け！」
崇は見事にタイミングを合わせてくれた。後方のカーウィンチが唸りを上げ、ワイヤーを巻き取り始めた。『マイコニド』の巨体がずるずると引きずられていく。崖下に落下した車でさえ引っ張り上げる強力なモーターだ、強化外骨格と言えど単純な力だけで振りほどけるものではない。
なすすべもなく引きずられていく僚機を見て、もう一体の『マイコニド』が電撃銃を向ける。だが、撃てない。龍一は完全に引きずられる『マイコニド』の巨体に身を隠している。仲間を巻き込む覚悟で強力な電撃銃を放つ、というところまで覚悟を固めるには時間と余裕が必要となる。
それを失わせるのが龍一と崇の狙いだった。
「夏姫、あのBMWのエンジンを始動させろ！」
【まかせて！】
魔法としか思えない早さでBMWがエンジン音を立て始めた。タイヤがゆっくりと路面を噛み、次第に加速。外骨格のパワーでワイヤーを引きちぎろうとする僚機の腰あたりにバンパーが耳障りな金属音を立てて激突した。そしてその行く手には、モーター音を立てて律儀にワイヤーを巻き取り続けるカーウィンチとパジェロの鼻面がある。
どしゃ、と音を立てて二体の『マイコニド』がパジェロのバンパーにめりこんだ。ちょうどBMWとパジェロにサンドイッチされた形だ。いくら強化外骨格でもトン近い車を跳ねのける力はあるまい。中の乗員に怪我はなさそうだが、手足を動かす以外にできないような状態だ。

「もういい、よくやった！　逃げるぞ！」
全身から水滴を振り飛ばしながら、崇が車に向かって走る。もちろん龍一に異存はなかった。

サイレンの音が市のあちこちから集まってくる頃には、崇も龍一も車をひたすら走らせていた。
「それにしても考えたな、サイボーグ化したゴキブリをこんなことに使うなんて」
へっへっ、と崇が奇妙な笑い声を上げる。「まさか、裏で二本足のゴキブリが糸を引いてるなんて夢にも思わなかったろうな」
息を一つ吐いて、崇はハンドルを握ったまま続ける。〈インストラクター〉による一日の総評といったところか。「目標が堅固なセキュリティに守られていたら、それを無効化する方法を考える。警備員がいればそいつをどうにかした上でセキュリティを無効化する方法を考えろ。Ａという障害があれば、それを無効化するＢを、そしてＢを可能にするＣという解を求めろ……忘れるな、犯罪もまた無数の『因数分解』の積み重ねなんだ」
「……なあ、一つ思ったんだが」
「うん？」
「百合子さんの抱えてる『暴力装置』って、俺たちの他にもいるのかな」
「たぶんな」
「じゃ殺しだの、爆破だの、もっと物騒な仕事を任されてる奴らもいるのか？」
「いるんだろうが、会ったことはないし、会いたいとも思わねえな」崇は低い声で言った。「高塔百合子がどうしてその手の仕事をお前にやらせないか、そのうちお前も、嫌になるほどわかるだろうさ」

用心のため市内で数度車を替え、事務所にたどり着く頃にはケース内のゴキブリは大半が力尽きていた。証拠隠滅も兼ね、龍一と崇は裏庭でガソリンをかけてケースごと燃やした。
こんな盛り上がらねえキャンプファイヤーは初めてだぜ、と愚痴をこぼしていた崇は、龍一が握り締めているものに目を止めた。「何だそりゃ？」
「線香だよ」
龍一はくすぶるケースの残骸に線香の一本を近づけ、火を着けると目の前の地面に突き立てた。「考えてみれば、今回一番の功労者だ。手ぐらい合わせてやるのが筋ってもんだろう」
「私にもやらせて」怖々近づいてきた夏姫が、龍一から一本受け取って同じことをした。「本物の害虫駆除の人も、年に一回は供養をするらしいわね」
龍一は黙って崇にも一本手渡した。お優しいお坊ちゃんにお嬢ちゃんたちだな、と呟きながら崇も渋々それにならった。

## さらにその数日後

　高塔百合子からの依頼はなかったが、だからといって龍一が暇であったわけではない。それどころか、崇から少しずつでも目を通すよう言われている警視庁ＯＢを通して手に入れた国内・国外犯罪組織の詳細な資料、夏姫から借りた金融工学の知識蔵書などを読む作業に忙殺されていた。加えて龍一は空き時間さえあれば狂ったように身体を鍛えており、さらに日常に不可欠な炊事洗濯買い物が加われば寝る時間さえ少なくなるという有様だった（学生時代の優に倍は勉強していることに気づき、龍一は時々おかしくなる）。
　その日もそのようにして、自由時間などほとんど取れないままに一日が終わろうとしていた。さすがに一息つこうとした時、携帯が鳴った。瀬川夏姫からだった。
　【龍一、今いいかしら？】
　「ああ、かまわないけど……どうした？」
　【あなたたちが持ってきたログの解析が終わったの。一大事になりそうよ】
　「へえ？　君が一大事って言うんじゃ、よっぽどのことなんだろうな。ムー大陸でも浮上したかい？」
　【茶化すんじゃないわよ】声を聞いただけで眉を吊り上げている顔が想像できるようだった。
　【今日ばっかりはあなたのブラックユーモアに付き合っていられないの。本当の一大事なのよ】
　次の瞬間、顔が強張った。夏姫がこのような声になる原因は、一つしかない。
　「……百合子さんに関係あることなのか？」
　【私の口からは言えないわ】ほとんど「そうだ」と言っているようなものだった。
　【悪いけどすぐ来て。場所は『ホテル・エスタンシア』の最上階、百合子さんのＶＩＰルーム。望月さんも向かっているはずよ】
　「わかった」

## ーー蠢動

「新しい依頼だ。〈資産〉の使用許可も出た」
「〈あれ〉か。ねえ、さんざん頼っておいて何だけど、〈あれ〉はどうも好かないよ。使う先々で血の雨が降るじゃないか。大げさすぎるし、何よりも派手すぎる」
「スポンサーからのご要望とあれば致し方ない。君だってわかっているとは思うけど、〈あれ〉の実戦テストも僕たちの仕事の一環なんだ。それに今回の標的、なかなか一筋縄ではいかない相手みたいだ」
「ロシア大統領の〈処理〉でも依頼されたのかい？」
「場所は日本。相手は資産家の女性。興味深いのは、その護衛でね……これがその資料だ」
「……なるほど。なかなかに興味深いパーソナリティだ」
「ねえ面白いと思わないかい？　ＳＰでもなければ元軍人でもない、一介のごろつき相手に〈あれ〉を使えってさ。下水掃除に屋敷ごと爆破するのがスポンサーの流儀らしい」
「不可解と言えば確かに不可解だ。スポンサーは何に怯えているんだろうね？」
「不可解ではあるけど、別段僕らのやることは変わりない。世界のどこだろうと、相手が誰だろうと」
「美醜貴賤、老若男女の区別なく、生に苦しむ者すべてに慈悲深き刃を」
「そう、苦痛なき死を。眠るがごとき死を」
「わかっているじゃないか。よろしく頼むよ、『ヒュプノス』」
「こちらこそよろしく。〈あれ〉の扱いは君の方が長けているからね、『ヒュプノス』」

夜闇の中、日本海を航行する一隻の貨物船。
通常なら密入国者を満載しているはずのコンテナの中。詰め込まれた男たちの顔は陰鬱そのものだった。ありえたかもしれない輝かしい人生を思い描くことさえなくなった、幾つもの澱んだ瞳。最低限の照明、ないよりはましという程度の空調、それに加えて溜め息さえ飲み込むような沈黙。鬱屈した男たちで満たされた室内が快適なはずもなかった。
「装備も潜伏先も向こう持ちか。今回の『スポンサー』はずいぶんと太っ腹だな」
さすがに耐えられなかったのか、男たちの一人が陽気さを装った声を上げる。
「自前で用意する必要がないだけでもありがたい。これで失敗した日にゃ、目も当てられん」別の男が吐き捨てるように言う。「俺のダチにも、それで人生詰んだ奴が大勢いる」
「酒と女まで世話してくれるなんてな。白い肌に黄色い肌に黒い肌、アジア系から北欧系までよりどりみどりだ。本物の酒池肉林じゃねえか、なあ？」
「それで仕事自体は女一人殺せばいいだけ、楽なもんだ」
「つくづくおめでてえ連中だな……」
別の声がせせら笑う。
「何だと？」
「女一人殺せばいいだけの仕事、なんて抜かす時点でおつむの程度が知れてるってもんだ。本当にそれだけの仕事に大金ぽんと積む奴がいるかよ？　得物や隠れ家の提供も、酒池肉林も、生かして帰す必要のない仕事だからだろうが。これから殺す奴の言うことを何でも聞いてやる生贄の儀式みたいなもんだ」
「やめろ」
低く、落ち着いた声が遮った。「汚れた、成功率の低い仕事だ。それと承知で引き受けたーー今さら蒸し返す話でもないだろう。不満のある奴は前金を持って消えろ。誰も責めない」
それぞれに不満を押し殺しながらも、男たちは黙った。
「高塔家当主、背に銃創のある女、か」
皆をたしなめた男は懐から一枚の写真を取り出す。女学生の制服を着た少女の横顔を写した写真。風がなくとも揺れているような栗色の髪、色素の薄い灰色がかった瞳。目鼻立ちの整いようよりも、何かに挑むようなまっすぐな眼差しの方が際立つ娘の横顔。
何かを断ち切るように、男は写真に深々とナイフの刃を突き立て、壁面に縫い止めた。

# 奥付

## 砦食む白蟻ども

http://p.booklog.jp/book/93774

著者 : 井田和樹
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/shadowontheida/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/93774

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/93774

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ